

マンドリン馬鹿と呼ばれて半世紀

第一部

48 年卒 石田泰和

マンドリンと聞かれて楽器の形や音色、大きさをすぐにでも思い浮かべることができるかと思います。それほど有名な楽器なのですが、あまりにも知られてないことが多すぎて書くことができないばかりか、この楽器の魅力に取り憑かれて半世紀、いやそれ以上のつきあいを続ける筆者のクラシカルマンドリンの魅力にまつわる半世紀以上に渉（わた）る顛末記録です。

「うつつを抜かす」という言葉は今ではほとんどあまり良い意味では使われなくなりましたが、語源を調べてみると「ある事に夢中になり、心を奪われる。」「夢中になって本心を失う。」とあり、まさに筆者にとってこのマンドリンとのつきあいはこの言葉「マンドリンにうつつを抜かす」につきます。

さてマンドリン音楽のジャンルといえば世界では大きく分類して2種類に分かれます。一つは筆者が長年半世紀を超えてうつつを抜かしてきたクラシカルマンドリン、もう一つはアメリカ開拓時代、ヨーロッパから渡ったイタリア系移民の持ち込んだマンドリン音楽が発展していった、カントリーウエスタンに分かれます。

ところが我が国では多くの方がマンドリン音楽と聞くと歌謡曲あるいは流行歌、演歌の伴奏といった印象を持たれますが、これは我が国においてのみこの特殊な分野での使われ方が広まり、マンドリンと言えば何かの楽団、バンドの副伴奏に使われる楽器といったイメージをぬぐいきれません。

ただ、この歌謡曲の分野で我が国にてマンドリンという楽器を広く知らしめた人物に古賀政男という人の存在なくしては語れません。この国民栄誉賞にも輝いた作曲者に関してはあまりにも有名で今更ここで紹介するまでもありませんが、この功績（マンドリン楽器の紹介）の大きさは測り知ることができません。古賀政男のマンドリンに関するエピソードは第二部で紹介させていただきますので、この楽器の紹介を続けます。



Shikama Totsuji

そもそもこのマンドリンが日本に伝わったのが、1894年（明治27年）四竈訥治（しかまとつじ）がイギリス人にマンドリンを贈られ演奏したのが最初といわれています。また1901年には比留間賢八が留学先のイタリアからマンドリンを持って帰国し普及に尽力したという記録が残っており、また詩人萩原朔太郎が比留間に師事しマンドリンを演奏していたのは有名な話とされています。

世界の主流を占めるクラシカルマンドリンとは元々イタリアを中心に19世紀初頭からヨーロッパを中心に発展

してきた音楽で、現在では日本周辺を含むアジア（中国、韓国、台湾）、泰国など東南アジアの一部、豪州、カナダ、米国など北米を主流にした南米と世界の大半を占め、今も多くの団体、プロ奏者、マンドリンファンが存在する世界です。

いったいクラシカル・マンドリンとはなんぞや？ただの歌謡曲の伴奏に使うマンドリンとどう違うの？と疑問に思われるかたも多いかと思いますが、同じ楽器

を使っても歌謡曲とは全くの別世界のジャンルの音楽である事を念頭に置いておいてください。

分かりやすく言えばマンドリン属の高音から低音を受け持つ数種類の楽器、具体的にはマンドリン、マンドラテノール、マンドリンチェロ、マンドローネといったこの4つの楽器と、さらに大合奏になるとコントラバス（これはバイオリン属の楽器で弦バスとも呼ばれます）一部管楽器、打楽器等も使ったりして、これらマンドリン属と補助楽器を使ってほぼバイオリン属と同じオーケストラを構成、演奏する団体をマンドリンオーケストラと称します。

さらにクラシカルマンドリンのため作曲された合奏曲、ソロやアンサンブル曲も含めて、正確に数えた方はありませんが推定で2～3万曲以上存在し、そのうち戦前戦後を通じてヨーロッパから日本に入ってきた曲と一部

アメリカ、日本人の手で作曲された曲を含めると、現在日本ではこれも推定ですが1万5千曲以上あるのではないと思われる特殊な音楽ジャンルです。

1万曲というとあまり実感がありませんが通信カラオケ登場する前の時代、レーザーディスクなどで対応していたカラオケ1店舗の曲数が3000～5000曲程度でしたので1万曲が1つのジャンルでと考えるとすごい分野の音楽ジャンルだと想像いただけたと思います。

余談になりますがこのマンドリンのオリジナル曲は多くが19世紀後半から20世紀前半に作られたものが多く、現在ではなかなか入手しにくく、演奏したくても楽譜が見つからない、手に入らないなど長年その普及に困難を極めておりました。しかし近年のインターネット世界の拡大により、熱心な世界の愛好家の努力等により、徐々に著作権切れの曲か

高崎弓彦
菅田敏光
比留間賢八
山内英夫（里見弾）



明治三十八年 学舎院補仁会における
我国最初のマンドリン四重奏

The first mandolin quartet in Japan Hiruma Kenpachi(center) 1905



左から：マンドリン、マンドラ・テノール、マンドセロ、ギター

らダウンロードできるサイトが増え出し、その楽譜の普及に拍車が掛かってきました。

ちなみに筆者だけでも所有しているマンドリン曲約 5000 曲近くも中野譜庫（世界的有名なマンドリンギターのコレクションで、氏の生前同志社図書館に寄贈された貴重な楽譜コレクションです）の複写など含めて世界中のマンドリンファンにダウンロードできるように、現在もネット上で公開しております。



Dayton Mandolin Orchestra

1910年頃の古き良き時代の頃のアメリカのマンドリンオーケストラ
前列左右の楽器は「パープギター」と呼ばれるGIBSON社が発明し
中音～低音域を受け持つ為のギターでハープの部分はおそらく共鳴で
音量を稼ぐためのもので、弾くことはなかったのではないと思われる
(今では見られなくなった歴史上にしか登場しない楽器で、現物は筆者も見ることがありません)

これは楽譜のダウンロードのみパスワード（無料）が必要で、必要ならお申し込みいただければお送りしますが、それ以外のマンドリン関連の興味深い資料、ある有名なマンドリンの作曲者のファースト、ミドルネームのフルネームを知るために100年の論争について最近決着がついた話なども面白いはなしも掲載していますので、お時間があればマンドリン馬鹿のH.Pも是非のぞいてみてください。

<http://vinaccia.jp/nj-collect/>
(フィオレンティーノのホームページ)

さて少し話がそれて一方のアメリカに於いて発展してきたマンドリンの話になります。

このカントリーにも長年にわたり、バンジョーやギターとマンドリンが主体となって使われてきました。しかしながらこのカントリーなどで使われてき



渦中の国ウクライナのマンドリン合奏団
使われている楽器からみておそらく100年ぐらい前ものと思われる

たマンドリンはイメージで抱いていただいている洋梨を半分に割ったようなラウンド形でなく、フラット型マンドリンと呼ばれています。

イタリア系移民によって持ち込まれたマンドリンは当初はラウンド型のマンドリンでしたが、やがてそれはアメリカのギブソン社というマンドリンギター専門の楽器メーカーにより、ギターのようなフラットな裏板に改良され、これらのフラット型マンドリンも高音から低音域の楽器が作られ、初期の頃はアメリカ各地でマンドリンの大合奏団が編成されて演奏されてきました。またギター・マンドリン・バンジョー専門の機関誌も長らく数社発行されていました。アメリカもかつては一大マンドリン王国を築いた時代があったことを忘れてはなりません。

そしてこのラウンド型はアメリカにおいてはフラット型に取って代われ、現在ではほとんど使われることはなくなりました。(ボールは Bowl Back すなわち井鉢の裏型の意味です) さらにその後楽器の使い方が大きく変わり、編成は小さくなりカントリーバンドの一員として使い出され、しかもこれらは座って弾くスタイルでなく首から紐でつり下げて、立って弾くのが主流となって現在のカントリースタイルに至るようになりました。

そもそもアメリカ建国の歴史において重要な音楽の移り変わりの原点と呼ばれるものはブルーグラス、カントリーミュージック、ゴスペル、オールドタイムミュージック、ジャグバンド (jug band)、アパラチアンフォーク、ブルース、ケイジャン、ネイティブアメリカンの音楽などが取り上げられます。

中でも大きなルーツとしては、特にニューオーリンズを発端にアフリカ系黒人より持ち込まれたジャズとアメリカ南部を発祥とするヨーロッパ系移民の白人を中心として発展してきたカントリーウエスタンがあげられます。これらはアメリカの音楽発展歴史に残る代表的な音楽史の一部として、またこのマンドリンという楽器はその歴史上、切っても切れない運命をたどっていくのでした。



*The Polytechnic Mandolin and Guitar Orchestra
outside the Crystal Palace*

1899年6月20日、ロンドンのシデナムにあるクリスタルパレスの前の階段に座っているポリテクニクアンドピープルズパレスマンドリンアンドギターバンドの92人のメンバー。

一方ヨーロッパを中心に発展してきたクラシカルマンドリンは20世紀初頭最盛期を迎え、日本に伝わるとやがて各地の大学を中心団体がつくられ、やがて社会人アマチュア団体の結成など瞬く間に日本中に広まる現象となりました。

筆者が初めてこの楽器を知ったのはちょうど高校に入った頃になります。クラブ活動を

選ぶに当たって当時「アーチェリー同好会」というものがあり、これに入ろうかと親に相談したところ、続くかどうかわからないものに高価な洋弓は買えないと、あっさり却下されました。仕方なくあきらめかけたそのとき、ちょうど姉が使わずに放置してあったクラシックギターがあったので、これなら買わずに済むし、当時入学した高校には珍しい存在



ボウルバック型とも呼ばれる
ラウンド型マンドリン

であった「ギター・マンドリンクラブ」というクラブがあり、入部のきっかけといえば、なんとなくギターを弾くなら一度は弾いてみたくなる最初の有名な曲で「禁じられた遊び」が弾けるようになれば、



フラットマンドリン

と単純な考えで入ったのが、やがてこれがマンドリンとの出会いと成り、この世界にうつつを抜かし、以後半世紀を超える長いつきあいになってしまい現在に至っております。そんなわけでマンドリンにうつつを抜かして毎日夜遅くまでクラブの合奏に、気のあった仲間とアンサンブルにと勉強そっちのけ、受験勉強はほったらかし、おかげさまで大学入学は少しゆっくり目に入らせていただいた次第ですが、これに関してはとくに後悔などはしておりません。むしろ感受性の最も高い、春秋富む時期での貴重な経験、ずっとつきあうことになる音楽を通しての友人造りなど、今となっては何物にも代えがたい財産となりました。

大学に入ってまず知ったのは本学にはマンドリンに関しての活動する場が全くなく、ギタークラブというのがあり、取り敢えず自分自身のスタートもクラシックギターが始まりだったので、ここにお世話になることになりました。

ところがギターというのは本来独奏楽器で、クラブでやる必要はなく大学によっては組織活動の都合でどうしても無理にギターで合奏を取り入れる団体もありましたが、この楽器の合奏での最大の弱点で泣き所は指揮がどんなに振り方を工夫してみても、一斉に同時に音を出すのが至難の業なのです。

バイオリンやマンドリンであれば擦（こす）ったり、トレモロで音を出したりでき、あるいは管楽器のように吹いたりする楽器はパート全員が揃わなくても、一人ぐらい遅れて入って（音だしで）も目立つことはありませんがギター、ピアノなどの撥弦、打弦楽器はこうはいきません。

従ってギターで合奏するのは自（おの）ずから限度があり、出だしは合わない、クレッシェンドなど微妙な音の変化はできない、音出しは一発勝負でしくじれば合奏にならない、やっけていても面白くともなるとも言え、ギター愛好家の方からひんしゅくを買いそうですが、これがギターでの合奏の現実の姿なのです。

ギター部に入ってはみたもののほとんど活動には参加せず、ひたすらマンドリン合奏に明け暮れるといった状態で結局、入部し始めからそこそこ弾けることはほかの部員も知っていましたので、学祭の演奏会の場にソロの演奏も依頼されてはいたものの、一回も出場することなく終わってしまった次第で、非常に申し訳ないことをしたと未だに慚愧の念に堪えません。

さらに大学後半から興味はギターからマンドリン族の低音部を受け持つマンドロンチェロ（バイオリンでいえばチェロに相当する楽器）に興味に移り、結局これが一生を通じてつきあうことになってしまう楽器となり、今となってはうんちくを傾ける顛末で現在に至っております。

マンドロンチェロ（マンドリンチェロ、セロとも）と呼ばれるこの楽器の特徴はバイオリンチェロと同じ調律です。ただ独奏楽器としての表現力や音域の広さはバイオリンチェロにはとてもとても及ば

ないものの、マンドリン合奏で使われると、その音量や音色で他のマンドリンパートの存在を脅かすほどの魅力を持っています。時には打楽器を彷彿させるような圧倒的なボリュームでマンドリン系の主旋律のメロディーに逆らったりする存在感もあります。

そもそもこの楽器は本場イタリアにて生まれたものですが、ヨーロッパ圏ではほとんど普及に至らなかったものの、逆に日本においては大合奏中心のマンドリンオーケストラが盛んと成り、その迫力やボリュームの必要性に迫られてこの楽器が積極的に取り入れられてきた経緯があります。

元々 19 世紀～ 20 世紀にヨーロッパにて作曲されてきた大半のマンドリン曲は 1st, 2nd マンドリン、マンドラテノール、ギターの簡単な 4 パート編成の曲がほとんどでした。つまりマンドロンセロというパートの必要性がなかったわけです。これが日本に伝えられ独自に大合奏向けに発展をたどることになり、特に 20 世紀後半から日本においてオーケストラが巨大化したことにより、これに伴ってマンドセロ、ベースや後述するマンドローネなどの低音パートを再アレンジして、大合奏で取り上げられるようになってきたのが日本での普及の最大の要因と思われます。

筆者がまだマンドリンを始めた頃はこのセロを初めとするマンドローネなどの低音系楽器はほんとに取り入れている団体は少なかったのですが、近年はこの低音系の楽器を取り入れる合奏団が増えだし、最近は各地の演奏会で堂々と独立し



マンドロンチェロとマンドリンの大きさの比較

left : Embergher (pecoraro) Mandolincello

right : Vinaccia Mandolin



ネット上（フリー素材）で見つけたイラスト、マンドセロを引く女性カッコ良いですねー女性が弾くと

たパートとしてこのセロ、ローネパート（弦バスを含む）が活躍している姿を見ます。このためマンドリン合奏では人数も多くなり、単なる舞台上の演出効果だけではなく実際の演奏に大迫力を持って表現されるようになっていました。

逆に近年ヨーロッパでは結構ドイツ、オランダ、イタリアなどの海外の団体にも刺激を与え、積極的にこの低音マンドリン系楽器が普及し出したというわけです。最近のネットなどで海外のマンドリン編成を簡単に垣間見ることができるようになってきて、とくにマンドセロにおいては弦バス同様今や全世界で使われるようになってきました。

低音楽器についてはもう一つマンドローネという楽器の存在をなくしてはこのマンドリンオーケストラを語ることはできません。このローネは高調ローネと低調ローネの2種類が存在しますが、現在使われているのは高調のローネの方をマンドローネと称しています。それと写真にあるようなフラット型では無く、ほとんどの団体がラウンド型を使っているのが主流です。

この高調ローネの特徴は音域がとくにマンドリン族の中でも狭いため、楽譜の低音部が出てくると頻繁にオクターブ上げる必要がありこれをカバーする音域の楽器が低調ローネになります。

低調の方は現在制作しているメーカーがありません、楽器がほとんど入手できない為この音域をカバーするために現在は弦バス（バイオリン系コントラバス）を各団体で使っていますが低・高調マンドローネの入った合奏の迫力には捨てがたいものがあります。プレクトラム（撥弦）楽器の究極の合奏、真骨頂とでもいえるのではないのでしょうか。

余談ですが上記写真の低調・高調ローネの比較写真は両方とも同じメーカーであるフランスのジェラ社のものですが両方ペアで鳴らしてこそ初めて素晴らしい低音のハーモニーを奏でます。筆者の友人（故人）がペアで所有していましたが事情があつて当方が譲っていただくこととなり、二度と市場に出回るような楽器でないことはわかっておりましたので、これも筆者のおなじみ懲りない衝動的入手となりました。

ただこの低音系のマンドリン族楽器はアメリカにおいては低調、高調マンドローネとは別の発展を見ることとなります。同じくギブソン社によってマンドバス（Mand-Bass）とよばれる弦バスと同じ音域、



低調、高調マンドローネ 大きさの比較
横のマンドリンは同じものです
右：低調マンドローネ
左：高調マンドローネ



マンドローネはさらに「高調」と「低調」とに分かれ、低調はマンドリン合奏の最も低音部分を受け持ちます。通常の合奏団ではこの低音域部分を弦バスとも呼ばれるバイオリン族のベースで代替しています。現在のマンドリンメーカーでは作っていないため楽器が入手できないためです。右が低調ローネ、ヨーロッパにて発達してきたマンドリンのベースで、左がマンドバスとも呼ばれ、アメリカで発展してきた同じくマンドリン族のベースです（ギブソン社製）。真ん中は大きさ比較のためのマンドリン（3点いずれも筆者所蔵）

調弦の楽器を生み出す流れとなっていました。

また参考までに現在マンドリンオーケストラの中音域に使われているマンドラ・テノールは元々マンドラ・コントラルトと2種類あったものの、アルトはヴァイオリン族のビオラと同じ音域であったことで楽譜が、ハ音記で表示されたのとハ音記号独自の楽譜になれる訓練が必要があり、これに比べてテノールはマンドリンのオクターブ下の音域で同じく、ト音記号での表示だったため普及しやすく、中音域はこのテノールが主流となってしまう、現在ではこれが主流となっておりマンドラ・コントラルトは歴史上の楽器になってしまいました。

しかしながらアメリカのカントリーにおいては中音域を分担するマンドリン族はこれとは異なり、マンドラと言えはこのコントラルトの音域すなわちバイオリン族のビオラのハ音記号の音域の楽器をさし、またマンドラ・テノールのことはオクターブマンドリン "Octave Mandolin" をさします。そしてそのマンドラの楽譜もマンドリン奏者が持ち替えて演奏しやすいように5度移調してト音記号を用いることもあります。独自の発展をした結果ややこしいですがこれが現状です。

あと、マンドリン族にはもう一点マンドリンを一回り小さくした4度上の調弦のクアルティーノ（グアルティーニが正しい）という楽器があります。かつては演奏会で使われた



現在では歴史上の楽器となってしまったマンドラ・コントラルト（写真中央 筆者所蔵）
右：各合奏団で使っているマンドラ・テノール
左：比較のためのマンドリン



筆者が海外のネットオークションで思わず衝動買いしてしまった、アメリカのマンドバス（ギブソン社製）。テール（底）にはエンドピンがついており、舞台上立てて弾くようになっており、横板には肩からベルトを掛けるフックピンがついている。

これまで調べたわけではありませんが日本の団体でこの楽器を使っているという情報は聞いたことがありません、ネットでも見たことがありません。日本ではここ（筆者宅）でしかこの楽器は見られないのかもしれませんが。参考までに、これまでに見に来た人もありません、これからもないでしょう！



Gibson Mando-bass
The Bass Voice of the Mandolin SteelGuitarForum.com

Gibson社のカタログに掲載されたMandobass



実際のマンドリンオーケストラ（アンサンブルスタイル）で
使われているマンドローネ2本
舞台後方、右がマンドローネ（低調）左がマンドローネ（高調）

ことは何度もありますが、音量が出ないと舞台での目視的演出上の効果を除いてほとんど使われないのでここでは割愛します。（実は何を隠そう筆者が長年探してはいるのですが未だに入手できないのです・・・ハイ）

少し長くなってきました。あまり専門的な内容が続き、ぼちぼち興味を持って読んでいただけなくなってきたかと思います。

第二部は少し話題を少し変えたマンドリンの話を予定しております。

「エー・・・あの古賀政男の東京ラブソディーがパクリの盗作だった！なんで？」

「浅田真央の国際試合のバックミュージック「チャルダッシュがマンドリンの為に作られたオリジナル曲だった」をお送りします。乞うご期待ください！第二部に続く・・・

（なお掲載の古い白黒写真は筆者の独断と偏見、一部カラー化のソフトを使い色つけしておりますことをお断りしておきます）。